女子学生の家庭生活観

——家庭・生活・家族に対する認識——

川　上　雅　子*

(1991年3月7日受理)

はじめに

今日，家庭，生活や家族などという言葉は様々な場面で強調されている。

たとえば，社会的に問題になるような事件が生じた時，それらの原因を解明するために，その背景としての家庭，生活，家族の状況が強調されたり，あるいは一方でその欠如や歪みなどが説明されることがある。

しかし，日常語としての家庭・生活・家族という言葉を人々はどのように認識し，解釈しているのだろうか。

多くの人はこれらの言葉をあまり意識せずに使用しており，その概念や本質，在り方などについて深く考える機会はほとんどないのではないだろうか。

様々な場面で取り上げられながら，現実的には自己の家庭生活を通して得てきた経験を基に，自然に形成されてきた認識の上で，人々はそれぞれの家庭や家族の在り方を理解しているのである。

一方，家庭，生活や家族などを学術用語として用いている家政学にとっては，その概念の規定は学問対象のひとつとして重要である。

この場合，日常に使われている言葉の解釈が基本となり明晰化されていくわけであるが，日常の言語ゆえにその規定は容易ではない。

本論は，このような問題意識を背景として，まず第1に家庭生活の認識の重要性を論じた上で，これから独立，結婚など新しいライフステージに入っていく女子学生を対象とした家庭生活観を分析するとともに，家政学や家庭科教育における課題を検討し，反映させたいと考えるものである。

1.　家庭生活認識の意義

一般に，人々は家庭や家族の在り方について混沌とした考えを持っている。

これらの考えが突出するのは，いかなる時か。冒頭で述べたように，今日はひとたび社会的な事件が発生するとその原因を家庭や家族，生活環境に求める傾向がある。

また，この場合「家庭は——でなければならない」「家族は——であるべきだ」というような観念で論じられることが多い。

しかし，このように日常的なものの観念を具体的に表現した途端，人々はこれらにとらわれ，客観的，間接的にこれらを捉えることになる。ついで，これらの観念が現実の感覚を的確に表現し得たかが問われるのである。

すなわち日常として意識下にあったものを観念として表現することは，規定化を促し，その理想の形や在り方を具現化することになるのと同時に，一方で，表出したものを支えていた意識下にあった土台を見過ごしてしまう場合も生じるのである。

先に筆者は，人々は一般に家庭や家族などについては深く考えないことが多いと記したが，それでも家族間が不和であったり，生活が困窮したりというような場合や，これから結婚し家庭を創設したり，独立して生活を営むような場合，人々は自然に家庭や家族，生活の在り方や観念を形成しているのである。

特に前者のような状況下で家庭や家族のことを意識し，その在り方を考えなければならないというのは，不幸な状態にあるといえよう。このような当事者にとって，家庭生活を認識し，それらを重視することは，かえって現実からの逃避を促したり，圧力に屈したりというような，より悪い状況をつくる原因になってしまうかもしれない。

また，これでは家庭生活の認識の意義を否定することにもなりかねない。

しかし，ここで「家庭は——であるべきだ」というような表現で，家庭の重要性が説かれ，その欠如が指摘され，強調されるような状態は，実際は多くの意識下にある混沌とした土台を離れ，すでに方向性を持った観念であることに改めて気づかなければならないだろう。

可能な限りあるがままの形としての自己の家庭，生活や家族を客観的に捉えること，これが第1に重要なことであり，その上で方向性のある観念が出てくるのが本来の順序である。

先に述べた前者の場合のみならず，後者の場合においても，現実の家庭生活を充分に認識することなく，理念や理想の先行した観念にとらわれすぎることにより，現実とのギャップを感じたり，挫折感を得たりなどというような不安に陥る状況は，筆者の考える家庭生活認識の

* Masako Kawakami
家政学科児童環境研究室

意義に値しない。

たとえ人々の家庭生活に対する評価が否定的な現状であったとしても，まずそれらを凝視し把握すること，その方法，過程が第1に重要であると考えるのである。

家庭生活のありのままの状態を凝視し認識することは家政学においては，食物学，被服学，住居学などのあらゆる領域において間接的，直接的に追究されてきた。

なかでも家政学原論の領域では，主に直接的な方法を用いて家庭，生活や家族などの用語の概念を追究している。

日本家政学会編『家政学原論』（1990，朝倉書店）による家庭，生活，家族の概念は以下のとおりである。

・家庭――家族のための基本的生活環境組織体
・生活――生命・生存を包摂した人間の日常的行為（人間と環境との相互作用）の統合的過程そのもの
・家族――基本的社会がなされる相互扶助的親族小集団

これらの概念はいずれも日常生活を基盤として，普遍化を試みたものであるが，厳密に考えると，時代や地域，文化などによってかなり異なるものとなり，暫定的なものである。

しかし，これらはそれぞれの形態，構成，規模，役割，雰囲気，機能などの側面から多角的に対象を捉えることの積み重ねによって獲得されてきたものである。

以上のように，家政学上の概念が日常の混沌とした言語感覚と明確に切り離すことはできない困難さがあるにしても，その前提として人々がどのように家庭生活を捉えているかを把握しておくことは重要なことと考える。

さらに，それ以前の問題として，本章の前半で述べたように家庭生活を認識することは，合目的的な精神を伴う生活活動をするために重要なことである。

すなわち，混沌とした自らの家庭生活を凝視することで生活の目標や，それに対する方法を改めて建てることができるのである。

本論ではかかる問題を解明するための前提として，日常の言語がどのように解釈され，認識されており，学術用語としての明晰化がどこまで可能であるのかを調査を通して理解しようと試みたものである。なお，認識の方法は意識や実態を調べるなどのような客観的な方法が取られることが多いが，本論では，女子学生を対象に自由記述の方法を用いた。これは多様な認識に対する質的な要因を分析するためであり，本論の目的からも数量的分析を優先するものとはしなかった。

女子学生を対象とした理由は，現実の生活を客観的に判断し記述できることが可能であり，さらに成長段階上，成人として次のライフステージである就職や独立，結婚などというような，自らの創設的な家庭生活観を曖昧ではあるが抱いている時期であると考えたからである。

2. 女子学生の家庭生活の認識

本章では，前章での家庭生活認識の意義をふまえて行った調査について述べたい。

調査の対象は，短期大学（家政科）及び専門学校（幼稚園教員養成課程）の女子学生253人であった。（表1）

調査の方法は，表2に示した項目を板書し，対象者がB5版の横掛用紙に自由に回答するものであった。所要時間は30分程度であった。

調査の時期は，1990年6月～7月であった。

調査結果の分析は，まず数理的な分析をし終えた後，内容の質的分析を行った。

なお，本調査に先立ち，大学生40人を対象に事前調査を行い，調査項目の妥当性について検討した。

1) 調査項目1についての結果及び考察

表3は，「家庭」「生活」「家族」に対して回答した単語の中で，4人以上回答が重なった単語について示したものである。

これらの単語は日常よく使用されている平易で恣意的な単語であり，そのほとんどが肯定的な意味を示すものであった。

無回答の数が高いのは「生活」であり，「家庭」「家族」に比べて回答し難い対象であったことが分かる。

一方，回答が重ならない1語のみの単語の回答が，全体に占める割合が高いのは「生活」で，31.6%（253人中80人）であった。後述するが，「生活」は「家庭」（22.1%，56人）「家族」（25.3%，64人）に比べて多様な捉え方がなされていることが分かる。

表3に示した共通の単語の関係を図示したのが図1であり，3語に共通して表れたのが『明るい』『楽しい』であった。

「家庭」「家族」に共通している単語は『あたたかい』『団らん』『円満』など6語もあり，前述した『明るい』『楽しい』を含めると，「家族」のイメージは「家庭」のものと重なり，そこからわずかに拡大したものと捉えられることが分かる。

「生活」と「家族」については『明るい』『楽しい』の共通語に加えて，『協力』があげられている。

表1 調査対象

（人）

調査対象校	学年	回答者数
短期大学（家政科）	1	106
専門学校（幼児教育）	2	147
計		253

表2　調　査　項　目

1.　以下の①～③の単語について，あなた自身の現状にもっともふさわしいことばを思い浮かべて書きなさい。 ①　家　庭 ②　生　活 ③　家　族	2.　以下の①～③のあとの文章を自由につづり，5～6行でまとめなさい。 ①　わたしの家庭は―― ②　わたしの生活は―― ③　わたしの家族は――

表3　家庭・生活・家族についての回答語順位

（回答者数 253 人）

家庭			生活			家族		
順位	回答語	人数（%）	順位	回答語	人数（%）	順位	回答語	人数（%）
1.	あたたかい	60 (23.7)	1.	楽しい	26 (10.3)	1.	団らん	37 (14.6)
2.	明るい	37 (14.6)	2.	忙しい	18 (7.1)	2.	あたたかい	19 (7.5)
3.	やすらぎ	13 (5.1)	3.	平　凡	11 (4.3)	3.	明るい	13 (5.1)
4.	団らん	9 (3.6)	4.	充　実	9 (3.6)	4.	仲良し	8 (3.2)
5.	円　満	7 (2.8)	5.	豊　か	8 (3.2)	5.	安　心	7 (2.8)
6.	楽しい	6 (2.4)	6.	明るい	7 (2.8)	6.	集　団	6 (2.4)
7.	落ちつく	5 (2.0)		苦しい	7 (2.8)		食　卓	6 (2.4)
	家	5 (2.0)	(8.	無回答	6 (2.4))		楽しい	6 (2.4)
9.	生　活	4 (1.6)	9.	協　力	5 (2.0)	9.	信　頼	5 (2.0)
	安　心	4 (1.6)		お　金	5 (2.0)		きずな	5 (2.0)
	幸　福	4 (1.6)		規則的	5 (2.0)		団　結	5 (2.0)
	なごやか	4 (1.6)		生きる	5 (2.0)		ほのぼの	5 (2.0)
	ほのぼの	4 (1.6)	13.	大　変	4 (1.6)	13.	円　満	4 (1.6)
				不規則	4 (1.6)		落ちつく	4 (1.6)
				暮らし	4 (1.6)		協　力	4 (1.6)
							4　人	4 (1.6)
							にぎやか	4 (1.6)
(・無回答		2)				(・無回答		2)

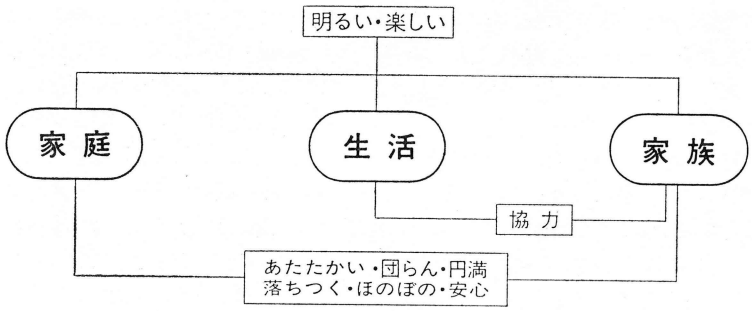

図1　家庭・生活・家族についての回答語の共通語関連

しかし「家庭」と「生活」の関係を見てみると，『明るい』『楽しい』という3対象に対する共通語以外には共通する単語が見られず，両者の独自性が明らかである。

次に，3対象について，各々の回答語に対する肯・否定的な評価（表4）の視点を加えて検討を行った。

なお，表4に示した肯定的，否定的の区分けは，調査項目2の自由記述の文章の内容から判断して行った。この場合，形容詞については比較的判断しやすいが，名詞については判断が付かない場合も多く，また，『忙しい』

のように否定的な意味あいの強い形容詞であっても，実際の記述においては，決して否定的な捉え方をしていない場合も多く，慎重を期した。

「家庭」に対しての回答語の大きな特徴は，表3に見られるように，家庭の全体的な雰囲気を示す『あたたかい』『明るい』という上位2語で，ほぼ4割近くの回答を占めている点である。

しかし，このことは回答する際の適当な語彙について，回答者自身が一般的な固定観念から抜け出せないというようなことも考えられ，このことは考察として留意すべき点であろう。

また，否定的な単語は表3では全く見られず，『あたたかい』『やすらぎ』『落ちつく』『安心』など精神的な安定を示す単語が見られる。

表4において肯定的な単語と評価されたものを見てみると，さらに以下の特徴が追加される。

- 『家』『庭』『温室』『台所』『日だまり』など一定の場，環境を表している単語が見られること。
- 『太陽』『灯』『日だまり』など明かりや光りなどに関する単語が見られること。
- 『食卓』『料理』『食欲』『台所』など「食」を中心とした単語が見られること。

このことは，先に示した精神安定の場としての「家庭」の評価につながる特徴である。

単なる家屋，器，場，環境としての「家」ではなく，明らかに基本的な欲求充足や精神安定の場として，機能性を含めたものとして家庭を捉えていることが分かる。

『テレビ』『テーブル』などは，一般には肯定的と捉えられる単語であるが，自由記述の内容からは判断しかねた。

一方，否定的な単語としてあげられた『枠』『居場所』などは「家庭」の形式的な存在を暗示しており，肯定的な場合とは異なり，機能性の低い家庭像が伺えるが，同時に，回答者個人の成長発達の問題にも深く関連していると考えられ，一方的な判断はできない。

これは『複雑』『厳格』など，回答者にとって精神的安定性が満たされていないことを示す単語にも，同様の解釈が必要であることを示唆するものである。

「生活」に対しての回答語において，他の2つにない第1の特徴は，表3に見られるような『苦しい』『大変』『不規則』などという表面的に否定的な単語が入っていることである。

しかし，2位に挙げられている『忙しい』という単語は，そのほとんどが必ずしも否定的ではない意味で使用されていた。すなわち，調査項目2の自由記述における「わたしの生活は大変忙しいけれども，毎日が充実していて楽しい。」などに代表される文章では，現実は多忙だが，それが苦ではないことを示唆しているからである。

第2の特徴は，上位3語の割合が他の対象語と比して低いことである。『楽しい』『忙しい』『平凡』の3語を合わせても2割程度であり，「家庭」の上位語の割合と比べるとその低さが分かる。

前述したように，同じ回答をした者が一人もいない単語の割合が3割を占めることとあわせても，「生活」に対する回答語は，ある単語に集中せず，多様性に富んでいるのである。

表4に視点を移してみると「生活」の捉え方には，さらに特徴的な点がある。

- 『活動』『活気』『自立』『一生懸命』『マイペース』『充実』『向上』など，生活エネルギーの再生産や自己実現などの発展的，啓発的な単語が見られること。
- 『優雅』『豊か』『快適』など空間性を示す単語が見られること。
- 『休養』『マイペース』『日曜日』『ゆとり』など，時間性を意味する単語が見られること。

以上の観点は，肯定的な評価に見られるものであり，動的で，空間性，方向性にその捉え方の特徴がよく表われている。

しかし，『単純』『不規則』『繰り返し』『習慣』などに代表される否定的な単語を見ると，生活リズムが1つの基準となっていることが分かる。なお，『規則的』という単語は肯定的な意味あいが強く，『単純』『繰り返し』などとは明確に区別されていた。

『疲れ』『大変』『苦しい』などは，主に時間的，空間的なゆとりの欠如からくるものであった。

「生活」のさらなる特徴は，回答語の大半が名詞であり，形容詞などが少ないことである。そのために，他の対象語に比べて肯・否定が判断しにくく，表4において「その他」に入れざるを得ない単語が多かった。しかしながら，その内容自体は興味深い。

第1点は『時間』『時計』『リズム』『川』『24時間』『人生』などのように時間性を意味する単語があり，しかも比較的長い時間感覚で捉えていること。

第2点は『糧』『お金』『家計』『給料』など経済性を意味する単語が示されていること。

第3点は『家事』『炊事』など生命維持のための活動が捉えられていること。

このように，「生活」の基本的要素が具体的に表現されているのである。

先に，図1においても説明したが，「家庭」と「生活」では共通した単語が見出しにくかった。両者は類似した言葉ではあるが，回答者は明確に判別していることがわかる。

表4　家庭・生活・家族についての肯・否定的評価分別例

	家庭		生活		家族	
肯定的	団らん	台所	充実	一生懸命	団らん	平和
	円満	太陽	豊か	幸福	仲良し	居間
	家	夜	協力	快適	安心	食卓
	生活	温室	規則的	向上	集団	かたまり
	安心	灯	暮らし	知恵	きずな	円陣
	幸福	旅行	食事	安定	団結	笑顔
	なごやか	日だまり	にぎやか	自立	信頼	一緒
	思いやり	母親	活動	大切	協力	協力者
	やすらぎ	平凡	活気	ゆとり	にぎやか	森
	食卓	中流	優雅	日曜日	円満	支え
	料理	個人的関係	休養	マイペース	輪	旅行
	食欲	調和	忙しい	生きる	血縁	空気
否定的	複雑	居場所	単純	圧力	形	いざこざ
	枠		不規則	平凡	集合体	時代錯誤
	厳格		繰り返し	大変	大人	男尊女卑
	がさつ		人間関係	習慣	バラバラ	気づかい
	不規則		疲れ	苦しい	絶対的	
その他	タイル		時間	家事	構成	
	テーブル		時計	炊事	健康	
	テレビ		リズム	糧	気分	
	核家族		川	お金	プロ野球	
	営み		24時間	家計	四角	
	洗濯		人生	給料		

「家庭」と比べると，「生活」は非常に動的であり，方向性，空間性がある。一方で，それを支える具体的な要素が示されており，構造的，多角的，創造的に捉えられていた。

また，「生活」は「家庭」よりも私的な視点で捉えられている。後述するが，調査項目2においては回答者自身の1日の生活時間などが記述されている場合が多く，まさに「わたし」の，自らの，把握が可能なのである。

「家庭」はすでに回答者にとっては，たやすく客観化できるものとなっている。従って極論を述べれば，その中の自分がどの位置にあろうと，その中心は回答者にとっては父母であり，その運営の責務からは逃れられるのである。

ところが「生活」は，自分自身のものとして把握しやすい一方，無回答が多いことからも，自分自身のこととしては，客観化しにくい対象であることを同時に意味しているといえよう。

「生活」は1人でも成り立つ。しかし，「家庭」は対社会としては存在するが，家族の存在がなければその機能は充分に作用しにくい。

その違いが恣意的とはいえ，明確に認識できていると思われる結果が出たと考える。

「家族」は，図1においても説明したとおり，「家庭」の認識を人的な面から強調，拡大した単語が多く見られる。

表3において「家庭」と共通している単語を除くと，その大半は『仲良し』『集団』『信頼』『きずな』『団結』『協力』などという家族の人的関係を示した単語であり，いずれも肯定的な意味で使われている。

『食卓』『にぎやか』は家族の集まる場，環境，雰囲気を象徴するものとして，また『4人』というのは，家族の人数，規模そのものを意味している。

このことは，表4における肯定的評価の単語においても同様である。

しかし，否定的な単語を見てみると，『形』『集合体』『バラバラ』など表面的な家族の関係を示す単語があげられていることが分かる。

『絶対的』『時代錯誤』『大人』『男尊女卑』などは家族及び父親，母親など，特定の家族員の権威や圧力に対する象徴としての単語であった。これらの単語の回答者の自由記述（調査項目2）から察すると，回答者は「子供」であり，その他の家族員（主に父親または両親）とは，「大人」として相対立する家族関係にある。権威構造が明確で威圧的であると回答者が感じている場

合が多く，個々の家族員の役割期待が一致していないのであろう。

なお，「家族」は「家庭」との関連は密接であるが，「生活」との関連は薄い。3者の共通語として『明るい』『楽しい』があげられたが，同じ『明るい』のでも，「家庭が明るい」「生活が明るい」「家族が明るい」のとでは，若干意味が異なる。

この場合，「家庭」と「家族」については，類似しているが，「生活」については，個人でも成り立つのであり，人的要素以外の物的要素（たとえば，金銭，時間，空間など）についての意味も含まれることになる。

以下，調査項目2においてもさらに検討したい。

2) 調査項目2についての結果及び考察

表5は，自由見述の内容を7つの視点から検討したものである。

概ね回答者は，100字から200字程度の短文を作成している。分析にあたっては，その文の意図する所を7つの視点から捉えたので，短文ではあるが，複数の要素を含んだものが大半である。

1) でも述べたように，「家庭」「生活」家族」それぞれの特徴が表5に示されている。

「家庭」は，全体の雰囲気を示した文が多く，それに付随して家族員の生活や性格が描かれているのが典型的なものである。

以下，内容が肯定的な例文を示す。

・「わたしの家庭は，みんな活動好きで，日曜日ともなるとサイクリングやピクニックに出かけたり，ボーリングをしたり，ショッピングをしたりと大変忙しいのです。最近は妹と行動が合わなくなり，みんなで出かける事が少なくなり，母が悲しんでいます。父は家庭を本当に大切にする人です。」

・「わたしの家庭は5人が3Kの家にひしめきあって暮らしているので家族との触れ合いが楽しいです。だからそれぞれが違うことをしていても，常にどこかで家族を感じ，その中で人への思いやりを学んでいます。」

・「わたしの家庭は今一番安心できて心の休まる所です。学校や仕事で疲れていても，家に帰ると心が休まり，体も休まります。みんなそれぞれが心配してくれたり，なぐさめてくれたりするので，とても優しさを感じます。」

否定的な内容のものは，次のような文章が代表的である。

・「わたしの家庭は，わたしの過去のような心にイヤな思いのする重たい家庭とならないよう穏やかなものにしてゆきたい。子供にも幸せと感じさせられるような家庭です。」

・「わたしの家庭は，父が遅く帰って来るので，ほとんど会うことがなく，母と祖母と3人家族みたいです。兄弟がいないので，つまらないです。」

すなわち，前者のように現実の家庭についての記述はほとんどなく，将来の家庭への願望や在り方を記したものや，後者のように現実の家庭への不満，批判のみで終始しているものである。

「生活」については，生活の一部の描写，なかでも日々の生活の時間的描写がほとんどである。それに付随して生活の雰囲気が述べられているが，それは今の生活についての反省や，今後の生活に対する決意や在り方を含めるものが多く，特徴的である。

・「わたしの生活は忙しいが，とても充実している。1日1日を一生懸命過ごしているという感じだ。」

・「わたしの生活は，毎朝7時ごろ目覚まし時計で起き，8時ごろの地下鉄に飛び乗り，駅から10分間学校まで歩き，4時ごろには授業が終わり，その後アルバイトや習い事をしたり，遊んだりします。」

表5　家庭・生活・家族についての内容

数字は253人中の人数，（　）は%値

内容	家庭	生活	家族
構成・規模・形態	0（　0）	0（　0）	178（70.4）
役割	4（1.6）	0（　0）	3（1.2）
全体の雰囲気	208（82.2）	88（34.8）	72（28.5）
生活場面の一部，雰囲気および生活時間の描写	64（25.3）	156（61.7）	40（15.8）
家族員の性格・実態	12（4.7）	2（0.8）	163（64.4）
反省・願望・決意	12（4.7）	98（38.7）	2（0.8）
在り方	8（3.2）	32（12.6）	4（1.6）
その他・無回答	6（2.4）	11（4.3）	4（1.6）

・「わたしの生活はいつも時間に追われています。気ばかり焦っているのかもしれませんが，ほとんど余裕がありません。満足感はあるが，時々ボケーッとした時が欲しいと思う。」
・「わたしの生活は，今しかできないことを重視している。」
・「わたしの生活は，学校へ行き，バイトをして毎日毎日同じことの繰り返しで息が詰まる。ストレスがたまる。なんとかしたい。」

「生活」に対しては，「家庭」と異なりその主導権が自らにあるということは，多くの回答者が認識しているところであった。

肯定的な文章の内容であっても，否定的なものであっても，他の家族員へ責任転嫁したり，環境のせいにしたりはせず，回答者個人の問題として捉えている。

反省とともに，願望や決意の内容が多いのも，個人の意思で変化させる可能性のあるものとして捉えているのであろう。

「家族」についての大きな特徴は，その構成や規模，形態について表していること，次いで各々の家族員の性格などの実態を述べ，それに付随して全体の雰囲気や生活場面の様子が描かれているのである。

典型的な文章は以下のとおりである。

・「わたしの家族は７人で，昔でいえば普通ですが，核家族の増える中，とても珍しい大家族だと思います。しかも，長男が家を継ぎ，両親の面倒をみるという典型的なパターンです。」
・「わたしの家族は，父，母，妹，弟，私の５人です。父はとても努力の人です。母はいつもニコニコして，楽しく優しい人です。妹はいつも人を笑わせます。弟は甘えん坊でかわいいです。みんなそれぞれ個性がありますが，全員Ｂ型です。」
・「わたしの家族はよく５人そろって茶の間でＴＶを見ます。朝や昼は一緒に食事ができませんが，夜だけは時々みんなで集まります。みんな自分の部屋を持っているのに何気なく集まってしまうのです。」

個々の家族員の描写では，職業や年令など明確な材料を記したものはほとんどない。一方，本調査で目についたのは，家族員の血液型，星座などの描写で，それに関連して家族の雰囲気や性格を表していることである。

「○○座だから，個性的である。」など，評価，判断の１基準として用いているのである。

また，家族の構成員は常識的には人間のみであるが，ペットである犬，ねこなどの種類，年齢，特技なども家族員と同様に記されているものも目につく。ペットが家族の一員として，大きな存在であることを伺わせる。

また，祖父や祖母の登場してくる描写は，ほとんどすべてが思いやり，尊敬の対象として表わされている。拡大家族として同居している場合や，すでに亡くなった祖父母に対してさえも家族の一員としての思い出として描かれていて，その存在と拡大家族を誇りに思っている者が多いのが特徴的であった。

「家族」については，願望や在り方などの描写は少なく，「家庭」より個々の家族員の描写や構成などが，具体的に示されている。また，「生活」のように自分の描写はほとんどなく，「家族」の一員に含まれた形としての自分が存在し，明確化されていなかった。

以上，1) 2) を通して女子学生の「家庭」「生活」「家族」の認識についてのいくつかの知見を述べてきた。

日常語としてのこれらの言葉を調査して分かったことは，30分程度の調査の時間が，回答者にとっては短いと感じられること，すぐには書き出さず，熟慮の上で書く場合がほとんどであったこと，むずかしいと感じる学生が多かったことなどである。

日常的であるがゆえに，様々な要素が浮かび上がり，統一できない場合もあるし，逆に何を記してよいのか分からないほど漠然とした対象である場合もある。

しかし，それだけに彼女らの置かれた家庭生活があたりまえであり，幸福であり，それらにとらわれる必要のない環境であったことを示すものなのかもしれない。

「家庭」や「家族」の認識は概して肯定的なものが多かったが，現実には様々な問題があり，決して楽観視してはならない。むしろ，『明るい』『楽しい』という願望や在り方を含めたものとして受け取るべきであろう。

また，「生活」については，女子学生の成長段階ではすでに自らのものとして，動的に捉えているということが分かり，精神的な自立へのきざしが感じられた。このことは，次章で述べる家政学や家庭科教育への課題として示唆されるものであった。

3. 家政学，家庭科教育への課題としての家庭生活認識

家政学において「家庭」「生活」「家族」の概念定義は基本として重要である。定義をする必要性の１つは共通した土台，価値を持つことに意義があるのであり，学術用語としては，その学問独自の捉え方や方向性がそこには含まれているのである。

しかし，日常性の高い言葉は，常に変化しているのであり，家政学者は概念規定の必要性と同時に，常に検証していく姿勢が必要である。家政学では，家庭や生活，家族について，その一部を客観的に把握する研究が多いが，そのもの全体を把握する総合的な研究をさらに積み上げることが重要である。

また，家庭や生活を既に自明のものとして扱うのではなく，その本質を考えること自体が，研究者及び家政学を学ぶ学生にとって第１の大きな命題であろう。

このような意識が薄いと，家政学の研究や教育は方向性のないものとなりがちである。それぞれがどのような家庭，生活，家族の在り方を前提としているか，また，現実をどの程度把握しているかなど，研究や教育の表面には出てこなくても，それぞれが認識することである。

家庭科教育においては家庭生活の認識について，新たな展開が見られる。

平成元年に発表された中学校学習指導要領によれば，男女ともに「家庭生活」の領域を学習することになるからである。小学校，高校では以前から家族，家庭を扱う領域があったが，中学では新しい領域である。

中学校においては実践的・体験的な学習を通して，『自己の生活と家族の生活との関係について理解させ，家庭生活をよりよくしようとする実践的態度を育てる』ことが家庭生活領域においての目標とされている。

さらに，指導事項として『家庭の機能と家庭生活の意義を知ること』『家族の生活と家族関係について考えること』の２点があげられている。

目標及び指導事項には『自己の生活』『家族の生活』『家庭生活の意義を知ること』とあるが，これらをどのように生徒に把握させるかが授業の内容，方法としては第１に重要である。自己の生活が把握できないままに，その意義を知らされることは，倫理的な意味が強いものとなる。前段階として自己の家庭生活全体を認識することの重要性がこの点からもいえるのではないだろうか。

お わ り に

本論では，日常語としての家庭，生活，家族についての認識がどのようになされているかを把握し，その重要性を述べるとともに，女子学生を対象とした調査からの知見を示した。その上で，家政学や家庭科教育において若干の課題を提起した。

今後，これらを活かした研究と教育を自らの課題としたいと考えるものである。

〔参 考 文 献〕

1)　日本家政学会編：家政学原論，朝倉書店，(1990)
2)　日本家政学会編：家政学事典，朝倉書店，(1990)